

平成二十一年度 入学試験問題

国語

第三回

【注意事項】

- 一、試験時間は五〇分です。(八時五〇分～九時四〇分)
- 一、問題は一ページから六ページまでです。
- 一、解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- 一、問いの中で、字数の指示がある場合は、句読点、記号等も字数に含みます。
- 一、解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

ぼくは(ア)タビの先々で、山歩きをしたり、泳いだり、キャンプをしたり、カヌーを漕いだり、ピクニックをしたり、バードウォッチングをしたりして楽しんでる。野外でのこうした遊びを「アウトドア」という。最近はよく日本語として使われるので、きみも知っているかもしれないね。もともと「屋外」を意味するこの(1)ありきたりの英語についてぼくが改めて考えるようになったのは、カナダのバンクーバーに住んでいた頃のことだ。

(イ) シュウイを海と山と森にかこまれた(2)カナダ有数の都市バンクーバーは、他の大都会にはない不思議な魅力をもつ街だ。

休日には多くの人々が森や海に出かける。日の長い夏の数カ月、人々は毎日のように五時に仕事を終えてから、自転車や遠出したり、ピクニックをしたり、カヌーを漕いだり、山登りをしたり、ウィンドサーフィンをしたりして楽しむ。それは、日本人の多くが仕事の後にパチンコ屋に行ったり、買物に行ったり、飲み屋に行ったりすると同じような一種の習慣なのだろう。それにしても大都会に住む人々が何に愉し(た)さや美しさや安らぎを見出すかという「こころの習慣」が、日本とカナダではこうもちがうものなのか、とぼくは感心させられたものだ。

しかし、今、(3)日本でも「アウトドア」ということばが定着し、アウトドアの遊びを楽しんだり、アウトドアジーンな暮らしのスタイルを求める人々の数は増えつづけている。

そもそも「アウトドア」ということばが流行しているのは「先進国」と呼ばれる四十カ国ほどに限られている。つまり、このことばは人工の世界が自然界から切り離された結果、そこに住む人々が「生きづらさ」を感じていることを示しているのだ。そしてその生きづらさは、暮らしの中から何か重要なものが失われたことを意味しているだろう。

失われたもの、それは多分、遊びだ。しかも遊びの中でも、最も古くて、最も深く、人間にとっての根っこのような遊び。それは自然とたわむれるという遊び。

失われた自分の根っこを求めて、だからぼくたちは屋外へと出かけてゆくのではないか。つまり、アウトドアとは、自然とのたわむれをとり戻し、それで生活の中にポツカリと空いた穴を埋めようとする試みなのではないだろうか。

思えば、アウトドアとは「(4)不便」だ。重い荷物をもって、電気も水道もレンジもないところへ出かけて行ってキャンプをする。なんでわざわざそんな不便なことをするのだろうか？ もちろんそれが楽しいから。不便と楽しさがそこでは裏と表のようにピッタリとくっついている。《あ》

もちろん、不便がいつも楽しいとは限らない。でも、「(4)不便」というものがあることを知っておくのは大事なことだ。同じように、便利が必ずしもいいことだとは限らないということを、ぜひ知っておいたほうがいい。《い》

きみは便利ということばで何を思い出す？ 高速道路、携帯電話、コンビニ、自動販売機、全自動の炊飯器や風呂、コンピューター、インターネット……便利はまさに現代社会のキーワードだ。便利のすばらしさに疑いを差しはさむ人は変わり者といわれ、ひどい時には仲間はずれにされる。便利のためには相当の犠牲が伴っても人々は平気だ。自動車という便利のためには、毎年世界で八十八万人の人が交通事故で死んだり、もつとずつと多くの人が排気ガスによる空気汚染で病死したりすることもたいして気にならない。自動車を走らせるための石油をめぐって戦争が起きたり、道路をつくるために、キチョウな自然が壊されたりしても、平気である人がほとんどだ。どうやら、便利は一種の宗教らしい。人々はそれをあがめ、その前にひれ伏す。自動ドアをもつ家をつくる業者がいて、そういう家で子どもを育てたいと思う人がいる。便利だからだ。液晶を使つて「一年中楽しめる」人工ホテルを「ハツメイする」科学者がいて、それを買う人がいる。便利だからだ。日本には今、四万店をこえるコンビニ（便利を意味するコンビニエンスという英語から来た名前）と、五百五十五万台の自販機がいつ来るともしれない気まぐれな客を待つて、夜を明るくしてくれている。《う》

(5) 便利教という宗教のこわさについて、もうきみは十分知っていると思う。便利の裏側にはいつもいろんな不便がくっついてくるといふこと。公害も環境破壊も、便利教が引き起こした大きな不便だといふこと。ぼくたち人間は便利を手に入れるために、他人に迷惑をかけるばかりか、自分自身が生きていくための土台さえ平気で掘りくずしてきたのだといふこと。《え》

それだけではない。便利はぼくたち自身の能力を低下させたり、心やからだの健康に害を与えたり、生きる楽しさをとりあげたりすることもあるのだ。たとえば、車のせいでぼくたちの歩く能力は衰え、肥満などの健康

上の問題が増え、散歩の楽しさが減る、というふうには。

「楽」という漢字には大きくいってふたつの意味がある。ひとつは楽しいとか快樂とかの「楽」。もうひとつは便利とか「楽」を意味する「楽」。「楽しいこと」と「楽なこと」。このふたつを混同し、まるで同じことを意味しているかのように思いこむのは危険なことだ。少し考えればわかるように、楽なことが楽しいとは限らない。便利で楽なことがかえってぼくたちの楽しさをうばってしまうこともある。そして、楽しいことが、難しくかったり、複雑だったり、面倒だったり、時間がかかったりすることはよくある。そればかりか、難しく、複雑で、面倒で、時間がかかるからこそ、楽しい、ということも珍しくない。

だから、ぼくたちはやっぱり、「楽しいこと」を「楽なこと」から区別しておいたほうがいい。★ファストな「楽」を手に入れるために、スローな楽しさや気持ちよさを犠牲にしないようにしましょう。そう考えるのがアウトドアという遊びだ。それは、楽で便利なことのかわりに不便で時間のかかるスローな楽しさをぼくたちに与えてくれる。

(辻信一『ゆっくりでいいんだよ』)

★アウトドアジー…アウトドア風の。

★ファストな……早い。

問一 — 線(1)「ありきたり」とありますが、この語の意味として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 単純な イ ありふれている
ウ やさしい エ 外国からきた

問二 — 線(2)「カナダ有数の都市バンクーバーは、他の大都会にはない不思議な魅力をもつ街だ。」とありますが、バンクーバーの人々と日本の都会の人々とはどのような違いがありますか。本文の表現を用いて六十文字以内で説明しなさい。

問三 — 線(3)「日本でも「アウトドア」ということが定着し、アウトドアの遊びを楽しんだり、アウトドアジーな暮らしのスタイルを求める人々の数は増えつづけている。」とありますが、その理由の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人工の世界には苦痛があふれており、そこを出て自然の中でやすらかに生活したい人が多いから。

イ 「先進国」ではアウトドアが流行しており、日本でもそのまねをしたがっている人が多いから。

ウ 自然から切り離された人々は自然の中での遊びを失っているため、それを取り戻そうとするから。

エ 「生きづらさ」を感じている人々は、自然の中で遊ぶことで新たな自分を見つけようとするから。

問四 (4)に入る三字のことばを文中から抜き出しなさい。

問五 — 線(5)「便利教という宗教のこわさ」とありますが、どのようなことですか。本文の表現を用いて七十文字以内で説明しなさい。

問六 次の文は、本文中に入るものです。本文中の《あ》《え》の中から最もふさわしい箇所を一つ選び、記号で答えなさい。
《あ、なんとという便利な世の中だろう！》

問七 — 線(ア)《オ》のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現代社会では、高速道路や自動販売機など、便利なものが数多くあるが、そのために逆に害を被ったり失ったりしている面もある。不便さと楽しさがむすびついた遊びであるアウトドアを知ることには、便利さになれた現代を見直すきっかけとなる。

イ 現代社会では、便利さを追いかつてもとめるあまり、自然破壊が深刻なものになっていて、かえって人々を不幸にしている面がある。自然の中で不便な経験をするアウトドアは、環境保護の面を持ち、人々に自然の大切さを実感させる、意義深い遊びなのである。

ウ 現代社会では、人々は人工の世界に住んでいて、便利ではあるが、自然と切り離された生活を送っている。そのような人々と自然をむすびつけるアウトドアは、人々に子どもころのすなおな心を思い出させ、現在の心の穴をうめてくれるものなのである。

エ 現代社会では、「楽しいこと」と「楽なこと」との区別ができていないため、人々は「楽なこと」をもとめることが「楽しいこと」だと思っている。カナダで生まれたアウトドアは、「楽ではないこと」がかえって「楽しいこと」だと教えてくれるものである。

② 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

洪作は立ち上がった。子供たちの歓声が風に乗って流れて来ている。いつか子供たちは墓地の右手の方に移動していた。

見ると、子供たちは洪作を真似たのか、みんな着物を脱いで、★せんら全裸、★はん半裸の姿で墓石と墓石の間を駆け廻っている。がき大将たちは、時々木馬でも跳ぶように、★ていご手頃な墓石のところへ行くと、それを跳び越えている。あとに続く一年坊主や二年坊主は、それを跳び越えることができないので、墓石をよけて廻ったり、わざわざ骨を折って墓石をまたいだりしている。

よくしたもので、駆け廻っている子供たちを配してみると、墓地は墓地というより、遊園地といった方がびったりする。陽光は明るく降っているし、時々墓地の周辺の雑木の葉をゆるがせて、風が渡っている。

洪作はおぬい婆さんの墓詣りもすませたので、そろそろここを引き揚げたくなっていたが、子供たちがあまり楽しそうに遊び惚けているので、それを打ちきることが躊躇された。

そのうちに、(1)山の上の遊園地には異変が起きた。子供たちはいつせいに、
—うわあっ！

と、口々に叫びながら、洪作の方へ駆け来ると、一人が、

「西平のおじいさんが来たぞ」

と、息を弾ませながら言った。がき大将の一人が、

「逃げる！」

と叫んで、駆け出した。子供たちはそれに従った。墓石と墓石の間を着物を首に巻いたり、頭から被ったりして駆け行く。

—こらっ！

大人の怒鳴り声が風に乗って聞こえて来る。

子供たちが四方に散って行ったあとに、洪作も顔を見知っている西平部落のくめさんという老人が姿を現した。仕事着を着、首に手拭を巻き付けて、手には鈍を持っている。

「こら、がき共！」

くめさんは、もう一度子供たちの駆け行く方向にどなっておいて、それから洪作の方に近寄って来た。

「あなた、洪作さんじゃねえか」

くめさんは言った。

「そうです」

洪作が答えると、

(2)「争われねえもんだな。おふくろの七重さんにそっくりだ。よくまあ、これほど似たと思うほど似ている。——いつ来なすった？」

「二、三日前です」

「ほう、それで今日は、おぬい婆ちゃんの墓詣りか」

「そうです」

「そりゃ、いいことをした。気の強い、みんなに余りよく言われなかった婆ちゃだったけど、あなただけは、よく面倒みた。眼の中に入れても痛くないほど可愛かった。——そりゃ、いいことをした。婆ちゃんも、さぞ悦んで

いることずら。今ごろ、墓の中で身を起こし、出べえか出まいか、とつおいつ思案してござらっしゃるべえ」

くめさんは言った。

「出るって、どこへ出るの」

「ここへさ。あなたの顔を見べえと思って、ここへ出て来る。ほかのどこに出ましように」

それから、

「それにしても、よく七重さんに似たもんだ。生き写しとはこのことだ」

くめさんはしげしげと洪作の顔を見守った。洪作は母親に似ていると言われたのは、これが初めてだった。これまでに誰からも、こんなことを言われたことはなかった。

「そんなに似ているかな」

「似ているどころじゃない。同じ顔をしとる」

くめさんは腰から煙管入れをとって、煙管に煙草を詰めた。そして一服吸ってから、急に思い出したように、

「あのがき共、悪戯しおって、——墓石を二つ倒しやがった！」

と言った。

「今日は何しに来たんです」

「うちの墓地に隣の墓地の木が被さっているんで、そいつを切つてやろうと思つてな」

それから、

「あなた、いま、どこに居なさる」

「沼津。でもじきに台北に行こうと思つてる」

「両親のところか」

「そう」

「やめときなさい。若い時は親許から離れている方がいい。修業中、親許に居る奴は、ろくな者にはならん」

くめさんは言った。考え方が少し違っている。

これまでいろいろな人から、親許に行つて家族と一緒に生活するようにと勧められて来たが、親許から離れているようにという忠告を受けたのは、こんどが初めてである。

「あなたは小さい時から親と離れている。とかく親と離れて育つと、変に僻んだ子ができるものだが、あなたはのびのびとしている。のびのびし過ぎるくらいのはのびのびしている。屈託がない。いつでも春みたいな顔をしている」

「厭になつちやうな」

洪作は苦笑した。春みたいな顔というのがどういふ顔であるか判らないが、いずれにしても、くめさんの言い方には安心して受け取りかねるものがあるのを感じる。

「いや、わしは何も悪口を言っているんじゃない。人間には春の顔もあれば、秋の顔もある。冬の顔も、夏の顔もある。門ノ原のあなたの伯父貴などは冬の顔だ。何もあんなにしかめ面していなくてもよさそうなんだが、いつでもしかめ面をしている。あそこは似た者夫婦だ。夫婦揃つていつでもぶつぶつ文句ばかり垂れている。どこか豪いところもあるだろうが、あれじゃあ、なあ」

「くめさんの顔は？」

「わしか。わしは夏の顔だ。年中暇なしで、こうして働いている。毎日汗ばかし拭いて生きている。いっこうに芽は出ねえ。まあ、一生涯には縁がなさそうだが、これも生まれ付いたものだから仕方がねえ。だけれんど、文句は言わねえ。夏の顔で結構だ。⁽⁴⁾日蔭にはいれば涼しいし、昼寝もできる」

くめさんは煙管に煙草を詰めては、ひと口ふた口吸うと、すぐ掌の上でぼんぼんやっている。

⁽⁵⁾「わが身の苦勞が苦勞にならねえ。苦勞が身につかぬえ。結構なことだ」

ここでもまた洪作は、くめさんの見方には誤りがあると思つた。全部が全部誤りとは言わないが、多少の誤りがあることだけは確かである。

「苦勞だつて、あるんだがな」

95

90

85

80

75

70

65

「そりゃ、人間だから、ちつとは苦勞だつてあるさ。だけれんど、あなたの場合は、その苦勞が身につかぬえ。苦勞が苦勞にならねえ。苦勞の方で根負けして引つ込んでしまふ」

その時、風に乗つて、子供たちの声が聞えて来た。

——洪チャ。洪作サン。

⁽⁶⁾ 節をつけて、子供たちは洪作を呼んでいる。洪作は立ち上がつて、声の聞こえて来る方に視線を投げた。墓地の向こうの隅に子供たちの固まっているのが見えた。

——待ッテロヨ。

洪作も節をつけて怒鳴つておいて、またくめさんの横に腰を降ろした。くめさんとの話を⁽⁷⁾打ち切る気持はなかった。くめさんと話しているのが楽しかった。

(井上靖『北の海』)

★全裸……………まるはだか。

★半裸……………からだの半分がはだかであること。

★遊び惚けて……………遊ぶことに夢中になって。

★とつおいつ……………あれこれ迷つて決心がつかないようす。

★煙管……………きざみ煙草を吸う用具。

★沼津……………静岡県の名。

★台北……………台湾の都市名。

★門ノ原……………静岡県の地名。

問一 ——線(1)「山の上の遊園地には異変が起きた。」とありますが、どのようなことですか。「遊園地」が何であるかを明らかにして四十字以内で説明しなさい。

問二 ——線(2)「争われねえもんだな。」とありますが、これはどのようなことについて言ったことばですか。本文の表現を用いて二十字以内で説明しなさい。

問二

——線(3)「婆(よ)ちやも、さぞ悦(よろこ)んでいることずら。」とありますが、この後も方言がでています。この方言の果たす効果の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 方言は人生の経験を積んだ老人が使うことによって、共通語以上に異常な印象を与える効果。

イ 方言で話すことによって、老人の生活する地域性が出て生々(なまなま)しい人物描写になる効果。

ウ 方言を使うことによって、日本語の表現が外来語(たがま)に頼らずに、物語に変化をもたせる効果。

エ 方言で語ることで、老人の話の内容が事実だけではなく人間の本質を述べることができる効果。

問四

——線(4)「日蔭(ひかげ)にはいれば涼(すず)しいし、昼寝(ひるね)もできる」とありますが、この比喩表現の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これまで休みなしに働いてきても出世することも金持ちになることもできなかつたが、季節の変化に合わせて、上手に精神も身体も健康に保って生活していくことができる。

イ 長い間一年中休まずに働いてきてこの後も豊かにはなれそうもないけれども、それは自分の境遇(きょうぐう)として受け入れて、自分の知恵や工夫(くわう)によって生活していくことができる。

ウ 長い間一生懸命(けんめい)に働いてきて世間には認められなかつたけれども、身体を使う仕事だけに季節の変化はよく知っていて、自然にさらわらずに生活していくことができる。

エ 一年中暇なしで肉体労働をしてきたが、生まれついた環境(かんきょう)から世間並みの幸福にはめぐまれなかつたにしても、世間の変化に合わせて身体を守り生活していくことができる。

問五

——線(5)「わが身の苦勞が苦勞にならねえ。」とありますが、「くめさん」がこのように考えた理由を、本文の表現を用いて三十字以内で説明しなさい。

問六

——線(6)「節をつけて、子供たちは洪作を呼んでいる。」とありますが、このように子供たちに慕(た)われる「洪作」の性格を示している一文を会話文以外から抜き出し、最初の五字を書きなさい。

問七

——線(7)「打ち切る」とありますが、「切る」を用いた次の一～五の慣用句の意味を、(意味)ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 風を切る 二 口を切る 三 しらを切る
四 手を切る 五 首を切る

(意味)
ア いきおいよく進む。 イ かかわりをやめる。
ウ つとめをやめさせる。 エ 知らないふりをする。
オ さいしよに言います。

問八

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「洪作」は、自分を遊び仲間と考える子供たちにも理解を示す人であるが、一方では苦勞のうちに半生を送った老人との話の中で自分の性格を知らされる思いがした。しかし、老人の生き方が自分の運命を受け入れることにあると言われて少し共感がうすれた。

イ 「洪作」は、自分を慕(た)う子供たちをしっかりとつける老人に驚(おどろ)くが、他の人とは違(ちが)った考えを思った通りに遠慮(えんりよ)せずに語るので強い関心をいさぐ。その上話の内容が本質を突(つ)いていて容易に反論できないものであることを思い知らされて、自分の未熟さを反省した。

ウ 「洪作」は、自分が子供たちから親しまれている理由がのびのびした性格にあることを老人から教えられて納得(なっとく)した。それと共にこの老人のように生まれつき苦勞を続けて生きていく人がいることを知って、人間の運命とは何かというようなことを感じた。

エ 「洪作」は、小学生の子供たちにも慕(た)われる性格の人であるが、墓参りの墓地で出会った老人からこれまで言われたことのないことを言われる。しかし、「洪作」は、自分のことや身内の人までも遠慮なく批評するこの老人の話に関心をもち会話を楽しんだ。